

## 日本語版への序文

この本の英語版 (*Resistant Islands: Okinawa Confronts Japan and the United States*, Rowman & Littlefield, 2012) は、もともと日本や沖縄以外の読者のために、英文で沖縄の直面する問題について簡潔にまとめたものでした。2012年は沖縄の日本「復帰」40周年にあたり、この本が沖縄の歴史と日米、世界との関わりを振り返り、問題を解決する一助になればと願ひ日本語版を出版するに至りました。本書の出版が、日本本土でもっと沖縄のことを知ってもらふ機会になればうれしく思います。

2012年夏に英語版を出して以来沖縄をめぐる状況は変わり、日本語版は読者対象も変わるということで、この本は英語版に相当の加筆修正を加えたものになりました。なので「邦訳」ではなく「日本語版」と呼んでいます。この文献からの引用をするときは、例えば日本語版にある情報が英語版にあることを仮定せず、どちらの版からの引用か必ず明確にしてください。また、この本は著者が直々日本語版を作成するという珍しい試みになっています。日本語版と原版の異なるところは、決して誤訳などではなく、著者2人の責任において修正した場所であると理解してください。また、この本は、英語の本をもとにしているというもあり、人物への言及は原則的に敬称略としております。

私が1962年6月、梅雨の雨の中を横浜港に上陸してから、今年は50年目です。この本の背景には、あるときは長く、あるときは短く、何回となく日本に滞在し、現代日本のいろんな面を見守って来た歴史があります。高度成長期からバブル期へ、バブル崩壊から日米関係の摩擦、変貌する北東アジアを目の当たりにした後では、沖縄を避けて通ることはできませんでした。沖縄には日本国家、日米関係、日本の民主主義の性格が集約的に現れているところだと思ふようになりました。東京や大阪など、本土には混雑、混沌の中で隠れているものが那覇や名護にいればはっきりと見えてきます。沖縄ほど市民と国家の利害が、大きく激しく対立し、対立の成り行きが住民の生活に直接影響を及ぼすところは見られません。

この本は沖縄についての本であるのは確かですが、沖縄に関する密約が、ウィキリークス、情報公開法により、研究者や市民から、また内部告発などから暴露されたことを踏まえ、私の前著『属国——米国の抱擁とアジアでの孤立』（新田準訳、凱風社、2008年）に続き、日本国家と日米関係を改めて取り上げた本でもあります。2012年7月、オスプレイ配備のような問題は米国政府が決定するものであるから、日本が「どうしろ、こうしろという話ではない。」という野田首相の発言は衝撃的でした。しかしそれ以上に恐ろしかったのは、この発言が政界でも世間でも大した騒ぎにならなかったことです。日本は主権国家ではないということを大半の日本人は認めているということでしょうか。

『沖縄問題』は同時に日本国家のあり方の問題でもあります。沖縄問題に真剣に取り組まないことには、日本の対アジア関係の難問を解決するのは無理です。米国の財政赤字の悪化には歯止めがかかる見通しもないのに、暴力的で無法な覇権を維持するために、米国による同盟国への要求は今後ますます厳しくなることが予想されます。それでも日本政府は米国政府を何としてでも満足させようと努力するでしょうが、それは沖縄と日本にとってだけでなく、アジアと世界にとって有益なこととは言えません。

2012年9、10月、日本政府はオスプレイの強行配備に反対する沖縄住民へ暴力的攻撃を加える行動に出ました。沖縄県民はこれまで、ありとあらゆる非暴力の抗議運動を展開してきたのですが、日本政府は頑として耳を貸さず、オスプレイを飛ばさせたのです。オスプレイは開発段階から現在まで、事故多発で安全性に大きな疑問があるにもかかわらず、住宅密集地に位置する普天間基地に配備されました。オスプレイが日本の安全に貢献しないことは明白なのに米国の言いなりになる日本政府のやり方に、市民たちが怒って普天間基地の各ゲート前に座りこみました。警察は、老若男女、国会議員であれ、誰であれ暴力的に引きずり出し、現場に市民を拘禁する場所を作って3時間以上もトイレにも行かせなかったのです。現場のシーンは将来の日本の禍々しい前兆のように思われました。日米政府が沖縄を力づくで制圧することが許されるなら、日本に民主主義が生き残れるのでしょうか。

私が満州(中国東北地方)を中心とした日中関係を専門にしていたころ、満州における反日運動の拡大を憂慮する日本の外交官の公電を読む機会がありま

した。とりわけ1927年の「東方会議」前夜の公電がまだ記憶にはっきり残っています。反日運動への対策をあげ、第一に説得、次に運動費を出して買収する、それから脅迫する、最後には武力を行使すると書かれていました。当時の方針がどんな結果になったか、いまでは周知のことです。沖縄もこのように敵の領土のように扱われてきているのではないのでしょうか。説得にも買収にも抵抗した沖縄を待ち受けるのが、脅迫と剥き出しの暴力でないことを願っています。

沖縄の人々から、「沖縄のことを取り上げ、書いてくれてありがとう」と言われることもあります。それは全くそうではないのです。歴史を作る人と歴史を記録する人では格が違います。歴史を作る人の方が断然偉いのです。沖縄の抵抗の歴史を書くだけの筆者たちを仲間として接してくれる沖縄の皆さんに深く感謝しています。沖縄の歴史を作る人々の勇氣と心の温かさに触れ、自分こそしっかりしなくては、と気の引き締まる思いです。この本のメッセージの核心は沖縄の「歴史を動かす人々」の声、9章にあります。読者の皆さんはこの章をぜひ見逃さないようにしてください。

この本はオンライン英語ジャーナル『アジア太平洋ジャーナル：ジャパン・フォーカス』(www.japanfocus.org)で一緒に沖縄のことを発信してきたバンクーバー在住の乗松聡子さんと書いたものです。このジャーナルの中心的存在である、ニューヨーク州イサカのマーク・セルデンさんには編集における助言をもらいました。日本語版を出していただいた法律文化社の小西英央さんに感謝します。この本は、オーストラリア、カナダ、米国、日本にいる著者や編集者たちが情報テクノロジーの力を借りて実現したものです。本書は近いうちに韓国と中国でも翻訳出版される予定です。日本の隣国でも沖縄の動向に高い関心があります。

本書が戦争や対立ではなく、平和と友好への小さな架け橋になればと願っています。

2012年10月

キャンベラにて

ガバン・マコーマック